

# ロシア元国営通信ジャーナリストが語る、驚愕のメディア内部事情

REPORTING FROM EXILE

2022年3月31日（木）16時10分

アイマン・イスマイル（スレート誌記者）

36

1



ロシア内外で反戦ムードが広がっている。サンクトペテルブルク（写真）では3月に入って反戦集会やデモが相次いでいる  
MARTON MONU-REUTERS

＜フェイクニュースを垂れ流し、「ボス」はプーチン。政府に反発してプロパガンダを妨害しようとする者もいれば、言われたとおりに仕事をしている者もいる。私は2015年にファクトチェックのサイトを作り、今年3月3日、国を出た――＞

ロシア人の調査報道ジャーナリスト、アレクセイ・コバリョフは3月初めにモスクワを離れ、ロシア国外から戦争の取材を続けている。彼の話をもとにスレート誌のアイマン・イスマイルが構成した。

◇ ◇ ◇

正直なところ、私がジャーナリズムの世界に入ったのは、ライブのチケットなどタダで手に入るものが目当てだった。

「声なき者に声を与える」など、高尚なことを言うつもりはない。この職業の真の理想と向き合うようになったのは、かなり後のことだ。しばらくは、ただ楽しんでいた。

今から20年ほど前、私はモスクワの地方紙で新米の記者としてスタートした。市政や文化欄のデスクなどを担当しながら少しずつ階段を上っていったが、ジャーナリズムを学問として学んだことがなかったため、キャリアの壁に突き当たった。

そこで2009年からロンドンに渡り、国際ジャーナリズムの修士課程で学んだ。修士号取得後もさらにロンドンに滞在して、ロシアのさまざまな雑誌の仕事をした。

そして2012年に、当時モスクワで最大の国営通信社だったRIAノーボスチに誘われた。

数年ぶりに帰ったモスクワは、とても刺激的な時代を迎えていた。私が働いていたのは事実上、国の宣伝機関だったが、多くの点で驚くほどリベラルだった。かなり際どい内容も掲載したが、検閲されることはなかった。

しかし、2013年12月、全てが崩れ去った。

2014年以前のRIAノーボスチは、とてもリベラルで心の広い編集者のチームに率いられていた。彼らは基本的に国家公務員だったが、ジャーナリズムの倫理に対して真摯だった。あからさまなプロパガンダや「フェイクニュース」はなかった。

2013年12月のある朝、ウラジーミル・プーチンの大統領令が発表された。RIAノーボスチを含む国営メディアを再編して、政府所有の巨大なメディア・コングロマリットを新たに設立するというのだ。

私たちは通勤途中にその知らせを聞いた。

私をRIAノーボスチに誘ってくれたリベラルなスベトラナ・ミロニウク編集長に代わって、彼女の長年のライバルで国営テレビ局RTの編集長マルガリータ・シモニャンが、新しい国営通信社として改名した「ロシアの今日」の編集長にも就くことになった。

シモニャンはうんざりするほどプーチン信奉者で、彼をボスと呼ぶ。ジャーナリストは大統領を自分のボスとは呼ばない。

新しい国営通信社の親クレムリンの経営幹部は、ニュースの在り方について、従来とは全く異なる見解を持っていた。それ以降、物事はまるで変わってしまった。とことん不条理だった。

【関連記事】[プーチンは正気を失ったのではない、今回の衝突は不可避だった——元CIA分析官](#)

次のページ 「誰かの耳にヌードルを入れる」は「たわ言を吹き込む」という意味

1

2

3

4

次のページ

# ロシア元国営通信ジャーナリストが語る、驚愕のメディア内部事情

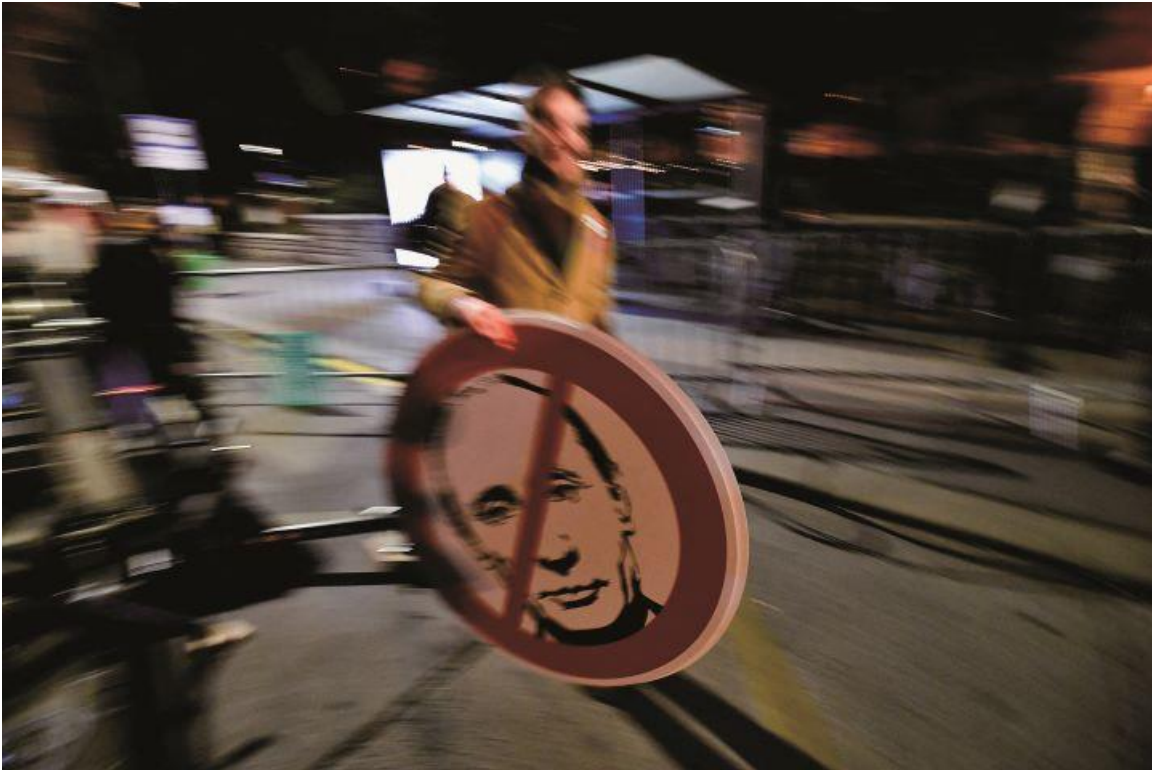
REPORTING FROM EXILE

2022年3月31日（木）16時10分

アイマン・イスマイル（スレート誌記者）

36

1



ハンガリーの首都ブダペストの国際投資銀行本社前でも反戦デモが（3月1日） REUTERS

## 心ある人のささやかな抵抗

ウクライナ戦争の第1段階が始まっていた2015年、私は産業的に作られたフェイクニュースがとても多いことに気付いた。そして、ロシアのメディアにファクトチェックの機能が一切ないことも理解した。

私が働いていたRIAノーボスチの後身も含めて、全てのメディアが、おぞましいプロパガンダとフェイクニュースを盛り上げているだけだった。

そこで、私は「ヌードル・リムーバー」というサイトを立ち上げ、地道にファクトチェックを始めた。ロシア語で「誰かの耳にヌードル（麺）を入れる」とは、「たわ言を吹き込む」という意味だ。

だから私は人々の耳からヌードルを取り除いてきた。今は本業に時間を取られ、サイトは2019年以降ほぼ休眠状態だが、いずれ復活させたいと思っている。

ファクトチェックには実際の調査が必要だから、私が調査報道に進んだのは自然の流れだった。クラウドソーシングやクラウドファンディングを利用して、かなり複雑な調査を始めた。

唯一の独立系英字新聞であるモスクワ・タイムズとも仕事をするようになった。彼らはとても精力的だ。

忘れてはいけない。最も重要な報道は、国営メディアのジャーナリストによるものではないのだ。

ロシアでは全メディアの90%を政府が所有している。主要な国営テレビ局のトップが全員集められ（独立系のテレビ局はもはや残っていない）、大統領府の担当者から直接、報道する話題を与えられる。

つまり、政府に命じられた話題だ。議論の余地もない。

政府系メディアしか見ない人は、おそらくロシア人の70%がそうだが、戦争が起きていることさえ知らないだろう。

国営メディアには、今も私の元同僚や友人がいる。何人かは政府の行動に強く反発して、自分にできることをしてプロパガンダを妨害しようとしている。自分がこの仕事をしなければ、ほかの誰かがやるだけだ。だから自分とはどまって、できる限りの方法で妨害しよう、と。

彼らは写真やキャプションの選び方など、ささやかな抵抗をしている。

私たちの内輪のジョークに、「悪ければ悪いほどいい」というものがある。当局に許された話題を提供していれば、報道のクオリティーなど誰も気にしないのだから、明らかにひどいものを作っても関係ない。

もっとも、私の元同僚の90%は、医療保険や年金など多くの特典がある楽な仕事だという理由で、言われるとおりにしてきた。

【関連記事】[ロシア軍死者数「即座に削除」された、ある情報](#)

【関連記事】[ウクライナで中国DJI社製ドローン分析製品が、ロシアによるミサイル誘導に使われている](#)

次のページ 2月23日、何か一大事が迫っていることは分かっていた

[前のページ](#)

[1](#)

[2](#)

[3](#)

[4](#)

[次のページ](#)

# ロシア元国営通信ジャーナリストが語る、驚愕のメディア内部事情

## REPORTING FROM EXILE

2022年3月31日（木）16時10分

アイマン・イスマイル（スレート誌記者）

36

1

### バッグ2つでラトビアへ脱出

私はプロパガンダ機関と化したこれらのニュースネットワークの編集者数人と侵攻直前に話をした。

今、彼らは意気消沈している。本当にショックだと語り、打ちのめされている。自分の仕事に集中できる——事実をそのまま報道できると思っていたのは妄想だったのかと自問自答している気分だという。

それでも、今となっては他の選択肢はない。ロシアにはもう独立系メディアは残っていないのだから。

2月23日、何か一大事が迫っていることは分かっていた。そこで、通常の始業時間は午前8時だが、その日は誰か1人が常にニュースフィードをモニターし、何か始まれば皆を起こすことになった。

私たちの読みは当たった。翌日午前6時、「始まった」というメッセージが届き、私は跳び起きた。説明は必要なかった。目を開けてラップトップを開くと、何が起きているかは一目瞭然だった。

以来、ほぼ休みなく働き詰めの毎日が続いている。

3月3日には早くも、近いうちに戒厳令が敷かれると噂されていた。そうなれば言論の自由はおしまいだ。大統領の権限で市民の自由のほとんどを停止し、国境も閉鎖することが可能になるからだ。

その場合、私は出国できないだろう。モスクワ発のフライトの行き先はまだロシアからのフライトを受け入れているほんの一握りに限られていた。しかも、そうした行き先へのチケット代は数千ドルに跳ね上がっていて、とても手が出なかった。

私は大急ぎで荷造りに取り掛かった。バッグ2つに手当たり次第に詰め込めるだけ詰め込んで、予約しておいたタクシーで妻と愛犬と共に国境に向かった。

9時間後に一番近くの検問所に到着。幸い、何の問題もなく、歩いて国境を越えた。それから約16時間でたどり着いたのが、ここ、ラトビアだ。

3月3日には編集部全員に一斉メールが届き、全員出国するべきだということになった。翌4日、ロシアの上下両院はロシアでは異例とも言える合同会議で、ある法案を可決（その日のうちにプーチンが署名し発効）。

うまい言い方が見つからないが、ジャーナリストの仕事が罪に問われかねない法律だ。ロシア軍に関する「偽情報」を流布したジャーナリストは罰せられる。

この日ラトビアに着いた私たちは、ヌードル・リムーバーへのアクセスが当局によって遮断されているのを知った。

「（私が独立系メディアで）ウクライナでのロシア軍の特殊作戦について偽情報を流布した」といった口実だろうが、明らかに私たちが戦争を戦争と呼んだせいだった。

次のページ **メドゥーサのビジネスモデルはこの1年で2度にわたり崩壊した**

[前のページ](#)

[1](#)

[2](#)

**[3](#)**

[4](#)

[次のページ](#)

# ロシア元国営通信ジャーナリストが語る、驚愕のメディア内部事情

## REPORTING FROM EXILE

2022年3月31日（木）16時10分

アイマン・イスマイル（スレート誌記者）

36

1

ロシアのメディアで政府の直接・間接の統制を唯一免れているのは、ノバヤ・ガゼタ紙だ。2006年に射殺されたアンナ・ポリトコフスカヤ記者をはじめ、暗殺されたスタッフや記者が最も多い。

そのノバヤ・ガゼタといえども、軍の検閲を受け入れるしかない。今もウクライナ発の驚くほど勇気ある戦況報告を掲載してはいるが、戦争については報じていない。

戦争への言及は一切ない。彼らはこの現状を受け入れざるを得ないのだ。私たちジャーナリストにとっては恥ずべきことだが、ほかに道はない。

【関連記事】[動画：プーチン「パーキンソン病説」が再浮上](#)

### 一般のロシア人に罪はない

ただし、私が現在ライター兼編集者をしている独立系ニュースサイト「メドゥーサ」は別だ。何しろ検閲の結果、生まれたのだから。

メドゥーサはロシアのメディア再編によって古巣を追われた人々によって2014年10月に創設された。ウクライナ戦争の第1段階が早くも本格化していた時期に、彼らはロシアを離れ、モスクワから空路約1時間半のラトビアに拠点を構えたのだ。

記者と編集者の大半はモスクワにいた。自分たちが亡命メディアやパルチザンだという意識はない。読者は数百万人に上っている。

今や私は毎日24時間戦争について報じているようなものだ。皆が週6日、1日約14～15時間働いている。

科学担当編集者はただひたすらリアルタイムの戦況マップを作製している。報道内容は戦争一色だ。

今もモスクワに残って国営メディアで働いている大勢の人々と話したが、彼らはすっかりやる気をなくしている。派手な反戦の主張や抗議の様子が中継され、「離反」はさらに増えるだろう——カメラの前に走り出て「戦争反対」と訴えた女性のように公然とではないかもしれないが。

ロシアの状況は目に余る。だが、一般のロシア人に不満をぶつけないでほしい。

今回の戦争の結果、メドゥーサのビジネスモデルはこの1年で2度にわたり崩壊した。まず昨年4月、ロシア政府がメドゥーサを「外国エージェント」と認定。この事実上の非合法化で、ロシアの広告主からの広告収入が断られた。

そして、数週間前にはロシア国内のユーザー3万人からの定期的な寄付もなくなった。3月5日、米クレジットカード大手のビザとマスターカードがロシアでの業務停止を発表したためだ。

おかげで、私たちはクラウドファンディング・キャンペーンを一晩で練り直す羽目になった。新たなターゲットは、メドゥーサが何かすら知らないかもしれないロシア国外のユーザーだ。

理屈は分かる——ロシアは有害で批判的になっている、というわけだ。

それでも、ロシアの普通の人々のことも考えてみてほしい。必ずしもプーチン政権を支持しているわけではない人々、何も悪いことはしていないのに苦痛を強いられている人々のことを。

©2022 The Slate Group

【関連記事】[自ら基地局を破壊し暗号化できない、携帯使えなくなり民間人の携帯を奪う……ロシア軍「情報」ダダ漏れ](#)

【関連記事】[孤独で危険な「絶対権力者」プーチンの本心を、「過去の発言集」から探る](#)

※画像をクリックするとアマゾンに飛びます



2022年4月5日号（3月29日発売）は「**現地からの報告** **ロシア人の本音**」特集。ウクライナ軍事侵攻で引き裂かれたロシア国民は、**プーチンの戦争**をどこまで支える？

[前のページ](#)

[1](#)

[2](#)

[3](#)

[4](#)